

雲輪瑞法

もくれん茶屋日記



もくれん茶屋日記

雲輪瑞法



〔著者紹介〕

うんりんすいほう
雲輪瑞法

1926年愛知県に生れる。1950年駒沢大学を卒業後、東京・三鷹の観音寺尼僧専門道場で修業。現在、愛知県知多郡南知多町の曹洞宗、大宝寺住職。尼僧としての優れた見識と豊かな人生体験をもとに、テレビや講演会などでユニークな活動をつづけている。著書に「瑞法の尼寺日記」「瑞法の尼寺めぐり」（いずれも大法輪閣刊）「尼僧冥利に尽きて候」（毎日新聞社刊）

もくれん茶屋日記

定価 880円

昭和52年10月10日 第1刷

昭和59年12月10日 第15刷

著 者 雲 輪 瑞 法

編集人 川 合 多 喜 夫

発行人 関 根 望

発行所 毎 日 新 聞 社

〒100 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450 名古屋市中村区名駅

印刷・製本／中央精版

© Zuiho

1977年

検印廃止 Printed in Japan

もくねん茶屋日記 目次

茶頭・春光尼誕生のこと 7

猫にも頭をさげるのこと 22

兎のお目々は どうして紅いのこと 34

もくれん茶屋由来のこと 49

俎上の鮎の心意気のこと 57

今度は素顔で伺いますのこと 67

春光尼ではまだ駄目のこと 77

ゴッホ氏・恋文のこと 95

鬘買ってきて頂戴のこと 104

桜の花なら真盛りのこと 116

廻転手・地獄と極楽のこと 127

触れなば落ちんその風情のこと 136

擬宝珠は花盛りのこと 142

へげんさまのこと 153

キヤッチフレーズはもつかいのこと 163

孫を連れてまたお詣りさせて頂きますのこと 171

それでもよくもお経が読めるのこと 179

まだ消えない灯のこと 197

煙草のけむりは紫じゃないのこと 206

来世は猫に生れたいのこと 218

生きるとは苦勞しながらせつせと何かすること

あとがき 240

装幀・石田優子

もくれん茶屋日記

茶頭・春光尼誕生のこと

まるくって、平ったくって、ニコニコしていて、いかにも人の好きそうな繁栄講の先達Kさんが禿頭から慇懃に帽子を取った。

「庵主様、お目出とうございます。いつもお豆で結構だなも、又、今年もご厄介になりますかなも」そういった途端、典座寮（勝手場）の方がひどく騒々しくなってきた。

「庵主様あ、庵主様あ、どこやいねえ、老でない若庵主様あ、どこやいねい、俺の好きな若庵主様あ、やあい……」一ばい気嫌のドラ声が、小っちゃな尼寺の庫裡を吹き飛ばしそうである。

「豊の奴、昨夜から、明日は庵主様のお寺じゃ、若庵主様のところで昼飯じゃと楽しんでたものだからなも……」と大人しい先達さんの方が少々気まり悪げである。それにしてもひねとはヒドイ。秋光老尼は怒りもならず、ブスツとした顔付で茶を入れる。

「豊さん、こっちよ、こっち、若庵主様はよう、こっち……」

納経場の入口から、春光尼がでかい声を張りあげる。

「そら、待ってました。若庵主様が見えんと張り合いがないがな、俺ら、お詣りにきた気がせんがな……」

白髪頭に向う鉢巻、納経担のうきようかつきのおっさんが老尼の差し出すお茶を一気に啜りながら、はやし立てる。本堂の前や、向いの水大師さまに詣っていた連中がゾロゾロと納経場の方へやって来て、

「庵主様あ庵主様あ、とようもてるなも、ほんとに、ゆんべから言いづめだぞなも、何か、おごってちょうよ!!」と言いくる。酒臭い息をはずませて、豊兄さんが春光尼にからみつく。

「若庵主様あ、いつみても、ポチャポチャツとかわいらしい若庵主様あ、わしよう、ほんとにあいたかったでえ……」車の中には、既に酔った連中が乗っている。お屠蘇機嫌である。この頃の団参（団体参拝）は、お正月でなくても、この一ぱい機嫌が非常に多い。まして、ゆるりと昼食を摂るこの寺のお詣り客には、酒気の入らぬ団体さんなど一つも無いと言っている。

この初詣での客にはお茶だけの用意でいいが季節ともなれば、それだけではすまぬ。おそばが出る。おでんが出る。般若湯も、ビールも、ウイスキーだってある。山海の珍味は勿論のこと。日頃静寂な山寺は、一瞬にして、修羅の巷となる。

春光尼は、毎年春がやってくるたび、ぐっと気合いを入れ替える。心と軀を組み替える。

西鶴も、ヘミングウェイも、ランボオも、てつぱり、プツリとちぎりすてる。そして、ガラガラ、ゲロゲロの小商人。こあきんど御有難やの若庵主様、愛嬌いいの若庵主様、大好きやの若庵主様、一遍、寝てみたいの若庵主様、握手して欲しいの若庵主様、顔見たかったの若庵主様、ふらつとするの若庵主様、お可哀そうやの若庵主様、一人で淋しいかの若庵主様、好きやと言え、好きやと答え、逢いたかったと言え、逢いたかったと答え、抱きたいと言え、抱かれないと答え、ただにヒラヒラと疲れ果てる。まだ帰りたくない先達さんや、参詣人に取巻かれていると、電話が鳴った。

「もしもし、和尚様おつちまですか、ハイ、町長ですがなも、今なも、ここに議長がおってなも、今日は、和尚様のお顔が見たいと言いますのでなも、一度、お詣りさしてもらいますが、およろしいですかなも……」

「あ、もしもし、僕。あのう、お寺に蘇鉄の木あるう？ でその古い株のところに若い芽がつ

いているう？ ウーム、それ煎じて飲むだけどき、え、誰かって、うん、僕のお嫁さん。違う違うそんなじゃあない、病気なんですよ、それ飲むとよく利くって言うから、じゃあ、じきに参ります。ね、よろしく」

電話もそこそこにしてやっとバスを送り出して帰って来るとまた電話。今度は、町会議員のチン熊氏である。ミツちゃんを受けている。

「もしもし春光さん？　なんだ、ミツちゃんか、寒いで部屋を暖めといてねっ、もうじつき行くから……」

「なんだミツちゃんかもないもんだ、チン熊なんかサービスしてやらんから」と、口をとんがらせた彼女は御気嫌甚だ斜めである。よいも、悪いもない。こちらの都合も、へったくれも無い連中である。それでも秋光老尼はぶつくさと言いながらもミツちゃんを拝み倒してコンロで炭火をおこしにかかる。もくれん茶屋は本来、大円寺が春期団参バスの休憩を目的に開設したのだけれど、季節以外は、こういった客が跡を断たぬ。理由は至って簡明である。値段が無いということ。住んでいる人間がきさくだということ。ちょっと街から離れた山中の一軒屋だということ。デアル。中でも、値段が無いという事が一番にものを言う。此処では、お賽銭と同様に、値段がいくらと定_{きま}っていない。出す方のフトコロ次第である。時には一文

無しの、あいでも、きさくな此処の住人どもは、お茶も、お菓子も、都合つけば、ビールも、般若湯も出してくれる。ちょっと気の利いたらしい客筋が、千円札の束をひらめかせたところで、別にサービスに変わりがない。

山の中の一軒屋、大円寺では、昔々から、歴代住職の経営方針が、チャンと決っているらしい。山寺は淋しいのだ。来る人が一人でも多い方が、お大師さまだってきつとお喜びになる。人が沢山にやって来て、おしつこだって多い方が有難いではないか。一遍やって来て、散々飲んだり、食べたりした連中は、二度目から必ず何がしかの賽銭を置いてゆく。そしてその後も、度々やってくるようになる。最近、海岸の駅前通りにスーパーマーケットを開設して鼻息の荒いチン熊氏がダンボールの大きな箱を担いで坂道を登ってくると、ドシンとでかい音を立てて納経台の上に置いた。

「こいで、何もかも全部揃つとる。設営よろしくたのんマス……」

箱の中を覗いて見ると、一級酒が二本、ジュースが五本、ねぎが一束にボコが十本、糸蒔二袋、と、あと牛肉が五、六百匁ばかり。

「すぎやきやるの」

「ウン、たのんます。部屋は私が今から行って仕度するから、みんなは、あとじっきに議長

の車でやってくる」

「しょうがないなあ、なんもせんでいいと言ったって、ほかならぬ、あんたのことだもの、ミツちゃん拜んで火鉢入れといたがな」と秋光老尼。何もかも材料持ちと言ったって、焼豆腐もありやしない、これだけぼっちで大丈夫かしらと春光尼おかしくなりながら、

「ねえ、ちょっとチン熊議員、ついでに部屋の前まで、酒とジュース運んどいてね」

「……俺が来ると、すぐに甘えちゃって、ほんとにいつまでたってもしょうのないこだなあ、ちいちゃんは」

「だって、アンタの顔みたら、甘えなきや損だもの……」

狎が驚いて眼鏡を取り落した如きご面相がくしゃくしゃとなって、

「とか、何とかおっしゃって、いつもうまいこと使われちゃうんだ俺は……」と彼氏は笑う。赤茶けた髪の毛が、頭の中央に向って無数にクルクルツと巻き上り、埃りっぱい天然パーマができ上っている。

「ねえ、今日は何人くるの？」

「俺も入れて全部で五人」

「町長さんは？」

「来るもんか、奴さん、来てもジュースしか飲めやしんもの、けど今日のはみんな町長のおごり……」

「へえ……だから、民主主義とやらは、こたえられないわねえ……」

現在、南東海町民が理解するところの民主主義なるものは、旦那衆（お金持）のご隠居に毎月お小遣いを差し上げてお守する。而して、町会議員なるものは、その小遣錢に狙いをつけては、うまい具合にすぎやきを喰べたり、チョロリと芸者の花代にすることらしい。

春光尼がお茶の用意をして新館の四畳半に行くと驚いた。ここ専用のガスボンベが廊下から部屋の中に運びこまれて、電気炬燵の上ではガスコンロが青い焰をあげて酒の燗がつきかかっている。

「……私しゃ、この寺は始めてじゃないが、若和尚様とは初対面ですがなも……」

しみだらけの、のっぺりとした顔を持ち上げて爺臭い小男が春光尼の方を見た。

「そうだな、この前、君達と路面視察に来た時は彼女はお留守だったなあ」とM氏。

町長どのから、出掛けに、お寺さまの炬燵蒲団を、すぎやきの汁で汚すといけないからと手拭を沢山あずかって来たという。町長ネーム入りのその手拭を、蒲団の上から、各々自分の膝の上に当たるところに掛けている。今のところ、まずは殊勝なご連中である。

「はい、私がここの住職でございます。涙もろくて、けちんぼで、惚れっぼいのが玉にキズの春光と申します」

「ヒヤヒヤ、これだからたまらんぞな、全く吾々はすぐフラツと頭にきちゃうんですよね、議長」

顔色の生ッ白^{なましろ}い、いつ来てもペラペラとよく喋るS議員が言う。

「こんなところに、こんな見晴しのいい部屋がこっそり有るなんて、一向に知らなかった、こりゃあ、へたな旅館よりマシですなあ」とY議員。何を言っている。いつもは、広く取りっ放した次の部屋で、ワーツと飲んで、騒いで、おし、つ、こばかり二度、三度立って、ヒヨロヒヨロと帰ったはずではなかったか。と呆れながらも春光尼は、

「おひとつ、如何^{いかに}？」など、盃をひねる。テンとすました美男子だが、年に数回大円寺にやって来ても、お大師さまにお賽銭十円とあげた例^{たとえ}がない。連れて来た、おへ、チャの若い妓とばかりひ、つ、ついて、誰もいない部屋の方にゆきたがる。

チン熊氏は設営係の責任上、専ら爛方で忙しい。たまに喋っても、フン、フンと皆の相槌ばかり打っている。

「熊さん、あんた今日は滅法、又、おとなしいことねえ」